

『源氏物語』 帚木三帖の構想的位相

— 「夕顔」巻「おのがいとめでたしと」の解に触れて—

呉羽 長

はじめに 帚木三帖の執筆の経緯

『源氏物語』「帚木」巻冒頭の語り手の言葉は、光源氏が秘めようとしていた彼の「すき事ども」が世間に広まったことの困惑を述べた上、そのような「すき」の人としての世評に対し、「いといたく世をはばかりまめたちたまひける」ありようこそが実際の源氏の姿であると弁明するものである。

光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚りまめたちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には、笑はれたまひけむかし。

まだ中将などにもものしたまひし時は、内裏にのみさぶらひようしたまひて、大殿には絶え絶えまかてたまふ。忍ぶの乱れや、と疑ひきこゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。(五三〜五四ページ、傍線呉羽)

「まめだちたまひける」とは、前巻「桐壺」で父帝の女御として入内した藤壺を源氏が一途に慕い、しかしそれを周囲に見せまいと抑制するところに現れるものであり、そのために彼は他の女性への軽薄な懸想を好ましく思うことはない（「うちつけのすぎずきさなどは好ましくらぬご本性にて」）。右文章の後半部、源氏が内裏にのみ「さぶら」うのは、一途に慕う藤壺との出会いを思うためであった。しかしそんな「まめ」な彼が一旦女性に思いをかけ、深くその女性に執心することがある。そうした例が、彼の中將であったときの「帚木」巻雨夜の品定めをきつかけとした空蟬・夕顔、更に末摘花といった女君との恋であった。このような「帚木」冒頭のことばが示す源氏における「まめ」と「すぎ」の関係性は、「紅葉賀」巻末近くの源典侍との関係をめぐる挿話におけるそれと類同するものをもつ。

前稿²⁾で私は、源氏青年期の「色好み」の特質を考察する中で、「紅葉賀」巻末近くにおかれた源典侍との関りをめぐる挿話がそれまでの同巻の内容との間に異質性をもちそれが帚木三帖の展開を導くとする池田勉氏の所説³⁾を受けて、「紅葉賀」巻当該話と「帚木」冒頭部の照応について検討し、帚木三帖の制作上の位置づけについて粗々見解を述べた。

「紅葉賀」巻前半で、桐壺帝は源氏の平素の真面目な女性関係について、「すぎずきしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人々など、なべてならず、なども見え聞こえざめる」と受けとめながら、新しく通うことになった女性について「いかなるもの限に隠れ歩いて、かく人にも恨みらるらむ」といぶかしく思っている（三三五ページ）。しかし、その後一転して老典侍との好色譚が始まり、物語展開上に前後不自然な印象を与えている。池田氏はその異質性が「桐壺」「若紫」「紅葉賀」といった巻々における、源氏への「ものほめがちなる」礼讃の叙述態度に対する反措定という形をとるところから生じたものであり、この一連の挿話が帚木三帖及び「末摘花」巻と同系統に属すべき話であるとして、これら四帖の制作に先行して四帖を導くものとされている。

右池田氏の見解の中で、「紅葉賀」巻末から帚木三帖及び「末摘花」、更に「花宴」巻と執筆が行われたと単純に考えて良いか疑問が残る。私見ではむしろ長編物語の基本的枠組が源氏の須磨流謫あたりまで構想されていた後に、趣向の異なる「紅葉賀」巻末近くの挿話に見る源氏の好き事が「帚木」冒頭部により総括され、更に空蟬以下の女性との「さるまじき御ふるまひ」の恋が導かれ、その展開の後に「葵」「賢木」などの巻々の中の増補的箇所が書き添えられて物語が重層性をもったものとする。

前稿で私は源氏青年期の人間像が紡ぎ出される事情について、

(長編的な構想の下での源氏の時間) 青年期の生の軌跡として整えられたとき、そうした既存の物語の秩序から自由になろうとする意識が新たな「色好み」の営為を導いて、「紅葉賀」巻老典侍の挿話・「帚木」以下四帖、更に「葵」巻Ⅲの挿話群⁴・「賢木」巻末の諸挿話などによる世界が挿入によって開示され、既存の物語の秩序に抵触しないところで物語内にその位置を占める。既存の物語の秩序への抵触が許されないことにより、その恋は完結した形で終わらねばならず、空蟬や夕顔との別れのように、そこに悲恋の結末が導かれることもある。こうして様々な位相でつくられ錯綜する源氏の色好みの行動が、藤壺への遂げられぬ慕情を底部にすえて逆境を生きる彼の青年期の中でそれぞれの意味を有し、相互有機的に絡まりつつ、その人生を紡ぎ上げていくのである。

と述べた。このように物語が作り出されていく過程で、帚木三帖は物語にどのような性格を加えていくのか。「夕顔」巻の記述に注目してそれを明らかにすることを本論の課題としたい。

一 藤壺・葵上・六条御息所をめぐる記述

前節に示したような制作過程をめぐる見通しの下で「帚木」三帖の創作の意味の把握を行うに際して、「若紫」「紅葉賀」と続く巻々の系統と帚木三帖、この両系統に共通して登場する女性たちをめぐる記述の違いについても検討しておくことにしたい。その記述の違いが帚木三帖をめぐる前節で述べた私見を傍証することになり、作者の創作意図を解明することになると思うからである。

まず藤壺との関係では、彼女は「若紫」巻で懐妊を自覚する。それは「三月になりましたまへば」とあり、その妊娠三ヶ月が源氏十八の歳の三月末以降のことにあたる。その懐妊を導く逢瀬が二人の最初の逢瀬であったわけだが、その逢瀬は一月のことと見なされる。

一方「夕顔」巻で、もののけに襲われたときの源氏の思いとして、

からうじて鶏の声はるかに聞こゆるに、命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ、わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり、忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、よからぬ童べの口ずさびになるべきなめり、ありありて、をこがましき名をとるべきかな、と思しめぐ

らす。(二六九〜二七〇ページ)

とある。ここで「おほけなくあるまじき心の報いに」とは「罪深く恋の思いを抱く」ことであり、『細流抄』に「藤壺に心をかけ給ふ事の空おそろしきむくいかとおぼす也」とあつて諸注これを継承することから、それが藤壺への恋情をもつことと考えられる。

この後十月一日に夕顔四十九日の法要があつた。そうすると最初の藤壺との逢瀬は「夕顔」巻の夕顔頓死事件の決着がついてからのことになる。

右の「夕顔」巻「おほけなく、あるまじき心の報いに云々」という源氏の思惟は、最初の藤壺との逢瀬以前に彼が確信的に彼女を犯す意識をもちそれに悩んでいたことを示す。「若紫」巻で北山の僧都の説法を聞いたときの「わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき」(二二一ページ)という悩みとは事情が違う。未遂の犯しにここまで悔やみ悩むことがあるだろうか。また深く悔やんでいたとしたら藤壺の密事は実行されることはなかつたのではないか。このような描き方がなされるのは、「夕顔」巻の内容が「若紫」巻での藤壺との許されざる恋の成就を前提にしている故であると考えられる。

次に葵上の造型についてみると、「夕顔」巻には、六条わたりの女を訪れる書き出しの箇所、葵上に疎遠を続けることに彼女が心を動かす記述がある。

秋にもなりぬ。人やりならず心づくしに思し乱るることどもありて、大殿には絶え問おきつつ、恨めしくのみ思ひきこえたまへり。(二四六ページ)

「心づくしに思し乱るることども」は主として藤壺への思慕をさす。源氏は藤壺などに心を向けているため葵上の所には疎遠になつてゐるのを葵上は「恨めしくのみ」思つてゐるとあり、ここで葵上の内面に立ち入つて嫉妬ともいえる心情を描き出している。

こうした葵上の内面は、「若紫」巻で源氏が北山から帰つて左大臣邸に導かれた際の次の記事とは重なりが認められない。

女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬを、大臣切に聞こえたまひて、からうじて渡りたまへり。ただ、絵に描きたるものの姫君のやうにしすゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてものしたまへば、思ふこともうちかすめ、山路の物語をも聞こえむ、言ふかひありてをかしううち答へたまはばこそあはれならぬ、世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年の重

なるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく思はずに、「時々世の常なる御気色を見はや。たへがたうわづらひはべりしをも、いかがとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど、なほ恨めしう」と聞こえたまふ。からうじて、「問はぬはつらきものにやあらむ」と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。「まれまれは、あさましの御言や。問はぬなど言ふ際は、異にこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともにしたなき御もてなしを、もし思しなほるをりもやと、とぎまかうぎまにころみきこゆるほど、いとど思しうとむなめりかし。よしや。命だに」とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君、ふとも入りたまはず。聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱ること多かり。(二二六〜二二七ページ)

源氏が病の治癒のために北山に出かけたことに葵上から何の問いかけもないことの物足りなさを言うと、葵上は「とはぬはつらきものにやあらむ」と言い、「いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌」を見せている。源氏の疎遠（問はぬ）ことのために葵上が彼に素直に従えない心の内を読みとることができるが、それは「絵に描きたるものの姫君のやうにしすゑられ」、端然と大臣の娘としての矜持を持つ中で、源氏の訪れのまれであることを意に沿わぬと感じた故の言葉であつて、「夕顔」巻の「恨めしくのみ」とある姿とは異質であらう。

しかしこのあと「紅葉賀」巻に入り、源氏が紫上を二条院に据えるという出来事がありそれを伝え聞いた葵上は心を動かす。

内裏より、大殿にまかてたまへれば、例の、うるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御けしきもなく苦しければ、「今年よりだに、すこし世づきてあらためたまふ御心見えは、いかにうれしからむ」など聞こえたまへど、わざと人すゑてかしづきたまふ、と聞きたまひしよりは、やむごとなく思し定めたることにこそはと心のみおかれて、いとど疎く恥づかしく思さるべし、しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひにはえしも心強からず、御答へなどうち聞こえたまへるは、なほ人よりはいとことなり。四年ばかりがこのかみにおはすれば、うちすぐし恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。何ごとかはこの人の飽かぬところのものしたまふ、わが心のあまりけしからぬすさびに、かく恨みられたてまつるぞかし、と思し知る。同じ大臣と聞こゆる中にも、おぼえやむごとなくおはするが、宮腹にひとりいつきかしづきたまふ御心おごりいとこよなくて、すこしもおろかなるをば、めざましと思ひき

こえたまへるを、男君などかいとさしもと馴らはいたまふ、御心の隔てどもなるべし。(三三二〜三三三ページ)
「恨みられる」のは、源氏が二条院に一人の女(葵上)を据えたことが伝わってからのことである。皇女腹の一人娘という矜持は、源氏
が自分をおろそかに扱うことについて許すことができず、一方で源氏は葵上の矜持をさほどに思わず、その行き違いが双方の心の隔てを作っ
ていることを、語り手は分析する。

葵上の明確な内面の揺れ、嫉妬ともいえる情が「若紫」巻に見られなかったものが、「紅葉賀」巻へと進むにつれて見られ、源氏と葵上
の心の食い違いから隔てを大きく作っていく様子を具体化していくが、「夕顔」巻の記事は源氏への「恨み」を先行させ源氏の色好みの噂
に嫉妬の情をもっているという書きぶりである。この記述はやはり、「紅葉賀」巻二条院への葵上引き取り後の記事を踏まえて執筆された
のではないかと考えられる。

三谷邦明氏は、帚木三帖で罪過にさいなまれる源氏をめぐる記述を例に、「源氏物語では第一回の読みと第二回の読みではその意味が相
違ってくるという意味構造を保っている。(不可思議な謎)という一回目の読みは、二回目では罪状に苦悶する姿へとその意味を変貌させ
るのであって、全く異なつた意味が現象するのである。」と指摘される。⁷ こうした二度読むことで可能になる読みという物語の方法は、現
行巻序に従つたものとは異なる執筆過程をこの物語が辿つたことに由来すると考えられるものであり、氏の指摘する方法とは、「若紫」「紅
葉賀」といつた巻々を前提にして帚木三帖が書かれていることに所以を求めることができるのではないか。

六条御息所をめぐる「夕顔」巻冒頭に「六条わたりの御忍び歩きのところ」とあり、これが御息所をめぐる最初の言及であるものの、
彼女の存在を意識させながら、明確に彼女を指すものとしてはいない。「葵」巻「まことや、かの六条の御息所の御腹の前坊の姫君、云々」
(一八ページ)という表現とは違つた書きぶりである。

これには、六条わたりの女と六条御息所が同一人物であることをおぼめかす意図があり、その臙化は夕顔の女をとり殺した物の怪の正体
を六条御息所の生霊と暗示しつつ明瞭にせぬまま「葵」巻での御息所の生霊の葵上への憑依を導くことに力を与えるものであるといえるが、
ここで六条わたりの女を登場させて後に「葵」巻で御息所が生霊を甦し葵上にとりつくことにすることによるような意味があるのだろうか。
むしろ「葵」巻の御息所像が既に書かれていて、もしくはそれが前提的に作者の意識にあり、それを受けて六条わたりの女が登場させられ

たものなのではないか。猿渡学氏は六条わたりの女と六条御息所との繋がりについて、「葵」巻の生霊出現の直前に語られる御息所の「つらき」心情は「夕顔」巻のそれと照応しており、「夕顔」巻の物の怪出現に至る展開と「葵」巻の六条御息所の生霊出現に至る展開とは全く同じ構造を持った物語といえる指摘されている。⁸この類似性は、「葵」巻の生霊出現が先行して、源氏と夕顔の女の逢瀬を中断させる物の怪を発する人として連想される存在として要請されたための類似性であったと考えられる。この点はお明確な根拠が見出しがたいが、創作過程を想定する一つの見方として示しておきたい。

以上、藤壺・葵上・六条御息所の「若紫」「紅葉賀」「葵」などの巻に描かれた姿と帚木三帖でのその関係を吟味して、帚木三帖の記事が「若紫」「紅葉賀」「葵」等の巻の記事を前提にして書かれているという読みについて提示した。前掲池田勉氏の見解と重ねて、帚木三帖は「若紫」「紅葉賀」「葵」等の巻の叙述内容を受けて執筆されているといつてよいのではないか。

二 「おのがいとめでたしと」をめぐる解

帚木三帖の記事が「若紫」「紅葉賀」「葵」等の巻々の内容を受けて執筆されているとすると、それぞれの巻は「若紫」以下の巻々の中へ挿入されたものである故、その内容は源氏の新たな趣向の恋を描きつつ結末を「若紫」巻の始発の状況に帰結させなければならないことになる。その制約の中でこれらの巻は執筆上どのような意味を有することになるか。「夕顔」巻に現れるもののけをめぐる記述に触れて考えてみたい。

「夕顔」巻で源氏が夕顔の君と陋巷の小家を離れてなにがしの院で夜を明かそうとするとき、この女君が物の怪に襲われて命を落とすことになるが、その物の怪が源氏と彼女の枕頭に現れ、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば云々」といって夕顔の君を掻き起こそうとする。

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女あて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、とめぎましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとす

と見たまふ。ものに襲はるる心地して、おどろきたまへれば、火も消えにけり。(二六四ページ)
この物の怪の正体はその言葉の解釈と連動して幾説かに分かれている。

「おのがいとめでたしと云々」の言葉は、その直前に源氏の思惟で、

内裏にいかにも求めさせたまふらんを、いづこに尋ぬらんと思しやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しいことほしうなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向かひをあはれと思すままに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける。(一六三ページ)

とある記述を受けるものである。このように源氏が御息所を思いつつ寝入ったときにものけが現れたことから、ものけは六条御息所のそれを思わせる書きぶりになっている。

ところが夕顔が亡くなり、その葬送が進められた後、ものけの正体について、

君は夢をだに見ばやと思しわたるに、この法事したまひてまたの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、荒れたりし所に棲みけんものの我に見入れけんたよりに、かくなりぬることと思し出づるにも、ゆゆしくなん。

(一九四ページ)

とあつて、源氏によつて廃院の妖物であつたと、正体が推測されることになる。ここで源氏はこの邸の妖物が自分の美貌に惹かれたことで、夕顔の死という不幸を呼んだと考えており、前後でもものけの実体について違った暗示が見られる。

このながしの院の物の怪が語るところの意味とその正体については、大別すると

①六条御息所の怨念が言ったもの(怨念説)⁹

②その邸に住む妖物が言ったもの(妖物説)¹⁰

③両者の折衷説¹¹

に分けることができ、また、これに物の怪を④源氏の「心の鬼(良心の呵責)」とする解¹²も加えることができる。

右の所説の中で怨念説を辿ると、門前真一氏は「おのがめでたしと見奉るをば」の「をば」に着目し、それまで接続助詞としての解釈が

なされていたこの「をば」が、その用例としては存在しないことからこの解を退け、妖物説を主張された。渡辺泰宏氏はその接続助詞としての解釈の妥当しないことの見解を受けつつ、「を」という格助詞の対象としては「ひと」「こと」などの語が補えることから、両者の妥当性を吟味した上、物語全体の内容から考えるべきとし、「おのがめでたしと見奉る（こと）をば」の解を採り、物の怪の正体を六条御息所の生き霊と考えるべきとされる。氏は後の、源氏がこの事件を振り返る場面で廃邸の妖物とする彼の推測があることを、「源氏がこのものを六条御息所の生霊と見ずとも、即それが物語の客観的事実とはなり得まい」とされる。更に猿渡学氏は、右の渡辺氏の解や榎原茂子氏の御息所のプライドを見る解を受け、「ときめかし給ふこそめざましけれ」に着目することで、この「いとをかしげなる女」には夕顔を見下す姿勢が見られ、自分の高さを見せしめられる。更に「いとをかしげなる女」の言葉には女の矜持が現れており、その矜持ゆえに自分よりも下位にある女に対する「めざまし」の感情を見ることができるとし、これを六条御息所の怨念と断定されている。

私見では源氏が物の怪を廃邸の妖物と推測することに夕顔との交渉をめぐる一連の叙述の帰結としての意味を認めるもので、これを憶測とすることに従い得ず、「をば」の下に「人」が略されていると解して、「おのがめでたしと見奉るをば尋ね思ほさで」を「われがいかにもめでたしと見申すお方をば心しておもとめになることなく」と訳す解¹³や、

前ページの源氏の頭に浮かんだ六条御息所の姿は、夕顔に溺れることの御息所へのうしろめたさが、夢になって源氏を攻めるものと理解できる。怪異の正体は、後の源氏の推定や夕顔と御息所との人間関係からみて、廃院に住む妖物とするべきだろうが、前後の文章は、故意に読者が妖物に御息所のイメージを重ねて受け取るように書かれている。¹⁴

とする見解を妥当とし、御息所の存在を源氏が意識した上で廃院に住む妖物が物の怪の正体であるとする解に拠ることとしたい。しかし、描かれた作品としての解釈としては右のようであっても、記述間に齟齬があることは否定できず、こうした記述が執筆の過程において現れたものと想定する余地が残されているものと考えられる。右に述べた六条わたりの女と物の怪を結びつけつつも夕顔の死後は物の怪の正体を廃院の怪とする結末には、当初から作者の意図したものが一貫した形で推し進められて物語が綴られたものか、考慮すべきではないか。巻の初めに六条わたりの女性が登場し、その存在を示しつつ、また夕顔との逢瀬の最中に源氏が彼女を思いやり、物の怪が現れて夕顔が頓死し、そして葬送の後夕顔に取りついた物の怪を廃院の妖物とする源氏の推測がなされるが、その間に作者において執筆構想の

変更があったと思わせるものがある。つまり物の怪の出現までとその後の段階では作者の物の怪に対する扱いに変更があったと考えることができるのではないか。

変更がなされたのは、当初の目論見として、ひたすら心やわらかな女との出会いと別れを、この女性を恋に積極的な女性として登場させて起動し、いつときその出会いを体験させた後、六条御息所の生霊とおぼしき物の怪によってその恋を終わらせようとしたものが、その恋を描いていく中で、『江談抄』などに見られる河原院での源融の亡霊説話などを準拠することにより、廃院に住む亡霊のイメージが強くなり、また御息所を夕顔をとり殺す張本人とすると後の物語展開、特に「葵」巻での御息所造型に差し障りが出てくることを見通し、当初の目論見を変更したということではないか。こうして作者は、物の怪をその邸の妖物として源氏に推測させることになったのであろう。

「おのがいとめでたしと」の正体をめぐる怨念説・妖物説という二つの解は、作者の意識の中で一方から一方へ変化したことを考えることによつてその併存を了解することができる。それは、作者が執筆に従つて物語内に作られる秩序を自覚しその展開の方向を変更することになったものとして理解できるであろう。

関連して、「夕顔」巻冒頭で、源氏が乳母の大式を見舞った際、近くに夕顔の花の咲く家を見つけ隨身に命じてその花を折らせたところ、その家の夕顔の女から女童を介して、夕顔の花に源氏への呼びかけとみえる歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」(一四〇ページ)を贈られたが、これを夕顔の女君本人の歌とし、「それ」は源氏を指すと見ると、夕顔の女君は男性に積極的に歌を詠むといった振舞いをする女性になり、このあと彼女は内気で控えめな人として描かれることと、性格的に齟齬を生ずることになる。これについて清水婦久子氏は、卑しい夕顔の花を光源氏のたとえとする右諸説を批判した上で、伝統的和歌解釈のつとつて「それ」という言葉は夕顔の花そのものを指すものとされる。¹⁵

私はこの二面性を、執筆の時間的経過に従つて、作者の意識が変更したことによつて生まれたものと考ええる。この歌の性格について作者の無理・失策とする解があるが、これを失策としても、夕顔を源氏とひきあわせるためには、こうした設定が必要であつたのではないかなぜこのようにしてまで出会いの場で夕顔を「すき」にしなければならなかったのかというと、夕顔と源氏の双方を「すき」にしてはじめて、この身分違いの恋、夕顔という中の品の女性との独自の仲らうが始まるからなのである。夕顔の「心あてに」の歌が好色性を帯びたこ

この不自然さは、このような点に理由があったのではないか。

三 夕顔造型の意味と「夕顔」巻の主題性

以上のように推測される執筆の経緯によって描かれた源氏と夕顔の恋の性格を、木村正中氏は

ここに展開する光源氏と夕顔との事件は、単に彼の多様な恋愛体験の一つということだけではすまされない。この卑俗な環境に思いがけない佳人を見出して、光源氏の情熱はそれこそ一途に燃え上がっていった。(中略) このように進展する物語の内質は、「雨夜の品定め」を契機としているにもかかわらず、もはや相対的な比較評価を絶した、純粋な恋愛の過程へと昇華するのである。(中略)

夕顔はまるで初心な乙女のように純粋なものが秘められ、可憐な愛が花開いたところにあるといえるのではないか。な性情の奥に男の情愛にひたすら身を捨てていく、より根元的な純真さを持つていたところにあるといえるのではないか。

と述べられ、「そうした夕顔の純愛は、一つには空蟬との対比関係の中で把握されるべき」とした上で、「上述のごとき純愛の世界が、そのまま永続しうはすなく夕顔の死によってその終局を迎えなければならなかったのは、まさに必然的というべきである。」「しかもその死が異常であればあるほど、その愛のこの世ならぬ純粋性が高められもしたのである。」¹⁶と捉えられている。氏の指摘は、身分に囚われない非現実ともいえる場で確保された純粋な恋の様態を示すものである。

およそ帚木三帖では、雨夜の品定めにおける左馬頭らの論議によって中の品の女性に興味を抱いた源氏が、空蟬、そして夕顔という二人の女性に出会う。空蟬は固く源氏の思いを拒み、夕顔はひたすらに従う心で源氏と行を共にしている。木村氏の指摘をまつまでもなく二人の女性は対照的な存在として描かれている。

空蟬の場合、老いた受領の妻としての自覚から源氏との情熱的な恋に心を傾けつつもひたすらに拒む女を演ずる。その恋を受け、それと対照的な相手との恋を演じさせることが「夕顔」巻で目論まれた。つまり日常性、社会的秩序に束縛されない純粋な男女の恋という趣向を、夕顔において実現しようとしたのである。ここに、夕顔と源氏との非日常の空間がつくられる。鈴木日出男氏は、日常的、あるいは社会的

に多様な人間関係にからめとられて、持ち前の魂をさいなまれるような不安定感をいなく源氏が、夕顔の物語で「あたかも現実の人間関係を遮断するかのように、幻想の官能の世界へとめりこんでいく。」と捉えられる。¹⁷ いつときの逢瀬に、夕顔はその性格の全てを凝集するかのようにして造型され、その刹那の時間の燃焼の後、美しい亡骸を残してその生を閉じる。恋が終わったとき源氏には現実への着地が待っている。

「若紫」「紅葉賀」「葵」という巻々の系列では、物語の中の現実の秩序が作られており、葵上・六条御息所といった女性との関係の中で源氏の社会的歩みが展望されようとしている。そうした秩序からいつとき解放されようとして作者は帚木三帖に別位相に恋物語を作り出したのであるが、その甘美な空間も、畢竟現実への立ち戻り（「若紫」以下の巻々の路線への回帰）が求められ、閉じられざるを得ない。そして現実を一時離れたことの反動の大きさ＝悲しみとして源氏の心を痛ましめることになる。「夕顔」巻で夕顔の死以後源氏は失望から病づき、夕顔の葬送等を通しての悲哀の大きさを背負うが、そのことはそうした「反動」として捉えることができる。こうして源氏は、「若紫」巻の始発の物語状況に自らを据えるのに多大な心的エネルギーを費やすのである。

物語の中に作られた秩序の枠から離れて更に非日常の恋の世界へ没入しようとする主人公の姿は、この後も『源氏物語』の展開の中で見られるものであるが¹⁸、物語の中で非現実な恋を作り出すとするそうした思いが、中の品の女性たちとの関わりを描き出したと言える。そうした現れの一つとして「夕顔」巻の世界は捉えることができる。

結語 夕顔像と作者の物語創作

『紫式部日記』冒頭、一条天皇中宮彰子の前にあつて紫式部が心中に抱く感慨、「憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづね参るばかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづわすらるるにも、かつはあやし」（一一一ページ¹⁹）とは、非現実の世界への傾きとそれに掣肘される「うつし心」の関係が示されている。紫式部の場合、そうした非現実への志向は、物語の進展につれて現実の秩序との繋がりを失いかねないものを有し、宮仕えの中で身の程を知りつつ孤独を生きる作者の現実の意識が物語の内に入り込む度合いを増す中

で、更に切実なものになっていく。

「夕顔」巻には、源氏によってなにがしの院に伴われ邸の門の内に入るまでの時を待つ夕顔の女の様子として、

霧も深く露けきに、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。「まだかやうなることをならはざりつるを、心づくしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしのめの道

ならひたまへりや」とのたまふ。女恥ぢらひて、

「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ

心細く」とて、もの恐ろしうすこげに思ひたれば、かのさし集ひたる住まひの心ならひならんとをかしく思す。(一五九〜一六〇ページ)とあるが、「うはのそらにて影や絶えなむ」には、そのように現実とは繋がりを失つて非現実の世界にのめり込み空に消えゆくおそれを示すものがある。夕顔が源氏との恋に没入を続ければそのような事態が予想できたであろう。夕顔との恋は彼女の死によりいったん閉じられるが、そうした甘美な恋に没入する志向と、一方現実の地平から切り離されるおそれは、物語を繰り広げていく作者の心の中に大きく占めていく。宇治十帖「浮舟」巻、最後のヒロイン浮舟が、匂宮に導かれて宇治山荘から対岸に渡つて隠れ家で宮との逢瀬の時を過ごし、宮を前にして詠む歌は、そうした作者の意識に繋がるものをもつ。

雪の降り積もれるに、かのわが住む方を見やりたまへれば、霞のたえだえに梢ばかり見ゆ。山は鏡をかけたるやうにきらきらと夕日に輝きたるに、昨夜分け来し道のわりなさなど、あはれ多うそへて語り給ふ。

「峰の雪みぎはの水踏みわけて君にぞまどふ道はまどはず

木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯召し出でて、手習ひたまふ。

降りみだれみぎはにこほる雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき

とかき消ちたり。この「中空」をとがめたまふ。げに、憎くも書きてけるかなと、恥づかしくてひき破りつ。(一五四ページ)

「中空にてぞわれは消ぬべき」という浮舟の思ひは、宇治川を渡る際橘の小島を見て匂宮と歌を交わし「橘の小島の色はかはらじをこの

うき舟ぞゆくへ知られぬ」(二五一ページ)と詠んだことも通じて、恋にのめりこんだ果てに現実に立ち戻ることができない自らの姿を予見するものでもある。「夕顔」巻の夕顔の女の思いは作者の意識を反映しつつ、更に物語の終局の浮舟の思いに近い内実を既に胚胎しているといえる。

注

- 1 『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男の各氏校注・訳 小学館新編日本古典文学全集版『源氏物語』による。
- 2 拙稿「光源氏青年期の「色好み像」の形成」(『菊田茂男教授退官記念 日本文芸の潮流』平成6・1、おうふう)。
- 3 池田勉氏「紅葉の賀」の巻の異質なものについて」(『国文学』第四二号、昭和42(一九七七)・3)。
- 4 「紅葉賀」巻の老典侍をめぐる件りに類する挿話など長編的筋書きを持つ挿話群に対しそれらの後に書き加えられたと考えられる挿話群。葵上の死を悼む源氏が籠居している際に三位中将と老典侍や末摘花のことを語り合う件りなどを指す。
- 5 「末摘花」巻も帚木三帖と同位相で執筆がなされたものと想定されるが、本稿では帚木三帖に限って考察を行うこととする。
- 6 伊井春樹氏編『内閣文庫本細流抄』(桜楓社)の本文に拠る。
- 7 三谷邦明氏「帚木三帖の方法―(時間の循環)あるいは藤壺事件と帚木三帖―」(『物語文学の方法Ⅱ』昭和64(一九八九)・6、有精堂出版)
- 8 猿渡孝氏「時めかしたまふこそ夕顔巻の「いとをかしげなる女」と六条御息所―」(『文藝研究』第一四六集、平10(一九九八)・9)。なお、氏はこの事実から、「夕顔」巻の物語がながしの院の物の怪による夕顔とり殺しの物語として読むべきものではなく、源氏への愛執に苦悩する六条わたりの女の姿を描く物語を中に内包している物語として読むべきものではないか、とされるが、この点については、考慮の余地があるものと考ええる。
- 9 『花鳥余情』『細流抄』のほか、島津久基氏『対訳源氏物語講話』(昭和12(一九三七)・11、中興館)、橋原茂子氏「六条わたりの女の特異性」(『源氏物語と歌物語研究と資料』昭和59(一九八四)武蔵野書院)、渡辺泰宏氏「おのがいとめでたしと見奉るをばたづね思ほさでその解釈ともものけの正体」(『中古文学』第四六号、平成2(一九九〇)・12)、猿渡孝氏8に掲げた論文など。
- 10 『源氏心くらべ』『伊勢源氏十二番女合』のほか、門前真一氏「夕顔の巻の構成と、ものけの正体」(『源氏物語新見』(昭和40・3)深沢三千男氏「夕顔怪死事件の一考察」(『源氏物語の形成』昭和47(一九七二)・9桜楓社)、中村あや子氏「ながし院の怪―夕顔巻―」(『源氏物語講座第三巻 光る君の物語』平成4(一九九二)・5勉誠社)など。
- 11 萩原弘道『源氏物語評釈』、池田亀鑑氏『新講源氏物語』上巻(昭和26(一九五一)・2)など。『源氏物語評釈』には、「此院にすめる妖物の御息所の

- さまになりて源氏君の思ひしをれ給ひ夕顔上の物おちする本上なるを氣どりてあらはれたるさまとは心得べき也。」(国文註釈全書本)とある。
- 12 橋本真理子氏「六条御息所試論―物語の方法をめぐって―」(『源氏物語の探求』第二輯、昭和51(一九七六)風間書院 手)
- 13 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎の各氏校注新日本古典文学大系『源氏物語』(岩波書店)の脚注に示された解。
- 14 1に掲げたテキスト頭注の解。
- 15 「それ」が源氏をさすとする解は、本居宣長「玉の小櫛」(『本居宣長全集 第四卷』昭和44(一九六九)、筑摩書房)、山岸徳平氏校注『源氏物語』頭注(日本古典文学大系、昭和33、岩波書店)、玉上琢弥氏『源氏物語評釈 第一卷』(昭和39(一九六四)、角川書店)など。これに対して「夕顔の花」を花そのものと見る高橋亨氏「夕顔の巻の表現―テキスト・語り・構造―」(『文学』昭和57(一九八二)・11)、滝沢貞夫氏「夕顔の巻私解―それかとぞみる・見奉るをば―」(『信州大学教育学部紀要』第六〇号、昭和62(一九八七)・11)などがあり、清水婦久子氏はそれら所説を受けて、宣長「玉の小櫛」以下の「定説」を批判した上、夕顔が頭中将を誤認したものであるという説(黒須重彦氏『夕顔という女』昭和50(一九七五)、笠間書院)についても頭中将と源氏を勘違いするはずがないとし、「それ」という言葉は夕顔の花そのものを指すとする(光源氏と夕顔―贈答歌の解釈より―)『源氏物語の風景と和歌』平成5(一九九三)、和泉書院。
- 16 木村正中氏「夕顔の女」(『講座源氏物語の世界 第一集』昭和55(一九八〇)・9、有斐閣)。
- 17 鈴木日出男氏「夕顔物語の主題」(『国語と国文学』平成10(一九九八)・11)。
- 18 このあと、玉鬘十帖における源氏と玉鬘の恋などもそれに当たる。拙稿「光源氏論―玉鬘十帖を中心として―」(『文化』第四四卷第三・四号、昭和56(一九八一)・2)を参照いただきたい。
- 19 山本利達氏校注『紫式部日記 紫式部集』(新潮日本古典集成)の本文に拠る。